

3. 荒川における自然の回復に向けた取り組み(エコロジカル・ネットワーク化)

<エコロジカル・ネットワーク化>

荒川流域全体の自然のつながりを強化するためには、下図で示したように、第一段階として生態系が健全に機能し、ある程度まとまった「核」となる自然の拠点を守り、その自然を回復させることが重要である。また、さらにそれらを川、谷地、傾斜林などを軸として互いに結び、市街地の自然とつなげていくことで、荒川流域全体の自然を豊かにしていくものである。

現在、荒川での取り組みは、荒川を自然の大きな柱と考え、荒川の河川敷にあるネットワークの「核」となる自然の拠点を保全・回復する整備を行うことにより、ビオトープのネットワーク化の実現を目指している。図 3-1 に荒川における自然の拠点を示し、下記に代表的な現在までの取り組みについてまとめる。

三ツ又沼ビオトープ(約 48km 地点)

三ツ又沼は荒川と入間川のかつての合流点付近の旧流路である。この沼へ続く水路両側の土地を平成 8 年度から公有地化し、平成 9 年度より新たに池を造る等の整備を行い、平成 12 年度に三ツ又沼ビオトープとして完成している。現在、NGO や地元市民団体によって保全・管理がなされ、湿地性の貴重な植物であるタコノアシやミズアオイをはじめ、オオタカやカワセミなどの鳥類が確認される自然環境が再生されている。

荒川ビオトープ(約 57km 地点)

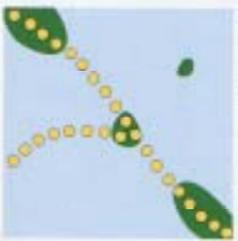
平成 6 年より、生態系最上位のサシバが生息できる広範囲な自然環境づくりを目指し、水路や池を新たに造成した。また多様な環境とするため凸凹の乾燥した草地や砂礫地などの変化に富んだ地形を創造している。人の立ち入りを制限する等の管理により、現在、キツネ、タヌキ、オオタカ、ノスリ等の生態系高次の動物が確認されるに至っている。

越辺川ビオトープ

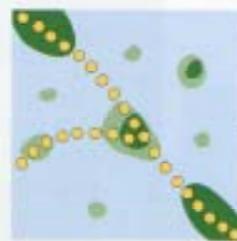
平成 6 年より全国に先駆け、天神橋下流の左岸側 500m 地点の低水路を河川整備にあわせビオトープ化し、カワセミ、オオヨシキリ等が見られる良好な河川環境となっている。整備及び管理にあたっては、流域の市民および NGO と協働、参画を積極的に推進している。

エコロジカル・ネットワーク

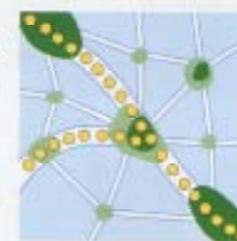
多くの生物はエサを採る、繁殖するなどの目的によって、あるいは1日・1年・一生のライフサイクルに応じて違うタイプのビオトープを必要とします。また、生きものは同じ集団だけで遺伝子の交換を続けていると、環境の変化に適応できない弱い個体が増えて種を維持できなくなります。そうした理由から、様々なタイプのビオトープを設け、行き来できるようにするとともに、同タイプのビオトープをつなげていくことが必要になります。



生態系が健全に機能した、ある程度まとまりを持った「核」となる自然を守る



点々となっている「核」の間の中つぎとなるような緑地や湿地を復元する



さらに大小の川、自然堤防上の屋敷林、谷地などの湿地、台地の緑の斜面林などでつなぎネットワーク化する

樹林のつながり(上尾市)



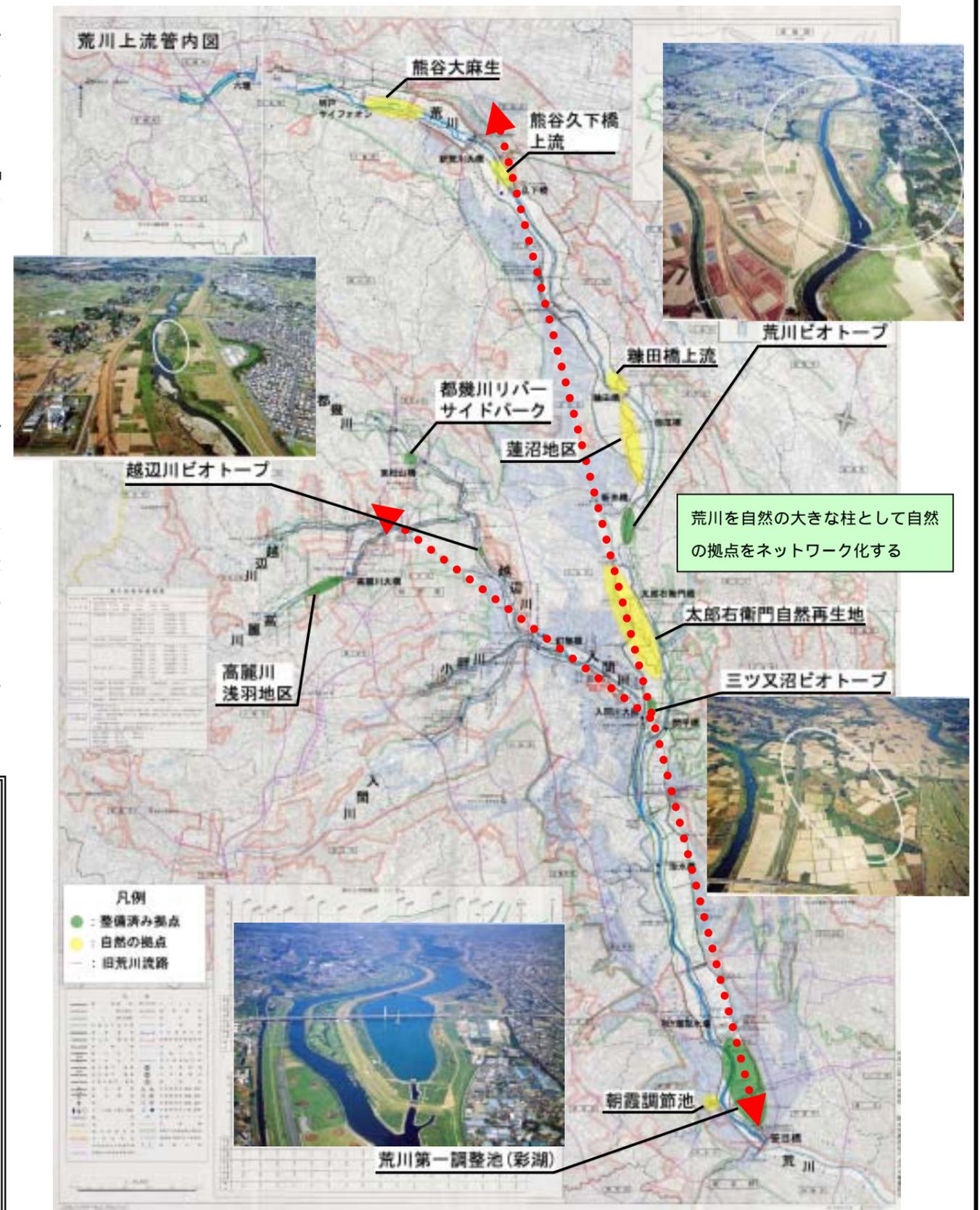


図-3.1 荒川に分布する自然の拠点